

1-2-9b近代

「近代」の後半です。

《豊かさ》について引き続きお話しします。

② 《豊かさ》

iii) 《切り離し》→アイデンティティの危機／自然環境問題

もちろん、《豊かさ》はよいことばかりではありません。

「**自由**」というと聞こえはいいですが、裏返せば、さまざまな人や物との関係性から切り離されているということです。

私たち人間は、他者とのかかわりのなかで《自分》を実感していますから、こうした切り離しによって「**アイデンティティの危機**」に陥ります。

「**主体性**」というと聞こえはいいですが、裏返せば、「俺TUEEE」と勘違いした中二病の一種だともいえます。

そうした自然への傲慢な態度が、深刻な自然環境問題を引き起こしています。

こうした問題が《切り離し》に端を発しているなら、まず第一に関係性の見直しこそ大切でしょう。

現代文で、《切り離し》を批判して《つながり》を主張することが多いのは、こうした理由です。

ただ、単純に《つながり》を唱えることは、《切り離し》によって得られた近代の果実をも手放すことになります。

環境問題を声高に叫ぶことは簡単ですが、それを引き起こしている科学技術が私たちの生活を支えていることも忘れてはならない、ということです。

たとえば、原発。

いまだ、使い終わった放射性物質を処理できないにもかかわらず、建設され稼働しています。

だからといって、それを単純に否定することは、原発が生み出す電力によって成り立っている、私たちの今ある生活を否定することになります。

その生活のあり方まで含めて考えられなければ、本当の意味での《つながり》を考えることにはならないでしょう。

人間と自然の関係を大切にしたい。

現にある《豊かさ》も大切にしたい。

この矛盾する願望を両立させることは決して簡単ではありません。

が、どちらかを単純に否定して答えを出した気になるのではなく、両立できないにせよ、どこに着地点を求めるか、深く考察することこそ、《つながり》を考えることです。

iv) 《切り離し》→近代合理主義

「**合理主義**」とは、物事を合理的に考えることです。

「**近代合理主義**」もまたその通りなのですが、「近代」が付くかどうかで大きく違う点があります。

君たちも日ごろ実感していると思いますが、世の中のすべてを合理的に説明などできません。

不合理としかいえない部分がどうしてもあります。

こうした不合理な部分まで抱え込んで、合理的であろうと苦しむのが本来の「合理主義」だとすれば、「近代合理主義」は、その部分を切り離して、残りの部分を合理的に説明します。

「近代合理主義」は、いわば《切り離し》の論理です。

都合の悪い部分は無視するのだから、「近代合理主義」は非常に明快です。

が、都合の悪い部分を無視したために、後々矛盾が生じることも多々あります。

科学が非常に明快に見えるのは、この「近代合理主義」に基づいているからです。

悪くいえば、説明できなそうなところは見なかったことにする。

たとえば、科学が扱う自然からは人間が排除されています（**デカルト二元論**）。

科学が自然のしくみを明らかにしようとする過程には、常時、科学者という人間がかかわっているはずです。

が、それを言い出すと、科学の客觀性が損なわれてしまう。

だから、ないことにしているのです。

では、人間を抜きにした自然のしくみを人間が使ったら、どうなるか。

その矛盾こそが、自然環境問題が起こる根本原因です。

それを解消するには、なかつたことについていたものを、まず、あると認めることでしょう。

だからといって、それは、これまで「近代合理主義」が築いてきたことを否定することではありません。

むしろ、その「近代合理主義」すら取り込んでいこうとする。

それが《つながり》の論理であり、本来の「合理主義」です。

v) ポストモダン

近代を「**モダン**」と呼ぶのに対して、現代を「**ポスト・モダン**」と呼ぶことがあります。

「ポスト」とは「後の」という意味です。

もし、現代が近代を乗り越えた後の時代だというのなら、近代のもつてゐる視野の狭さをどうにかしなければならないはずです。

《豊かさ》という概念も、もともと、物の「量」の多さが基準となっていました。

だから、いかに大量生産でき、大量消費できるか、が《豊かさ》の指標だったわけです。が、最近では、「量」ではなく「質」が問われるようになっています。

十分にご飯を食べられないとき望むのは、まずおなかいっぱい食べられること、つまり「量」です。

でも、十分に食べられるようになったら、次は、何を食べるか、ぜいたくが言えるようになります。

おいしいものを食べたい。

それは人によって違う。

さまざまな人が自分好みのもの、つまり「質」を求めるようになりました。

世の中の人たちみんなが量的に豊かになることをめざしたのが近代だとしたら、現代は、一人一人が質的によいものを求めるようになりました。

こうした多様性を認めることが「ポスト・モダン」の特徴です。

かつて医学は、延命を至上命題としました。

一秒でも長く生きていることをよしとしていたわけです。

が、今では、終活として、延命治療にNOと言うお年寄りも増えています。

命の長さより、それぞれの人の生の質、QOL (quality of life) こそ大切だと考えられるようになったからです。

先にも述べたように、《切り離し》を批判して《つながり》を主張するのが現代文の特徴です。

「一」を批判して「多」を主張する、といつてもかまいません。

ここでも、「量」だけを重視することを批判して、さまざまな「質」を求めようと主張していることに注目してください。

vi) 村→国家→世界

近代は、社会全体が豊かになっていく時代です。

それにしたがって、経済的な社会単位も大きくなっています。

近代以前には、人々は、村という共同体のなかで暮らしていました。

が、それは、経済的に貧しいからこそ、みんなが互いに支えあい助け合って生きていく社会の大きさとして、村という小さな規模が適当だったからでしょう。

近代になって、豊かになっていくと、より大きな経済単位が必要になります。

それが、**国民国家**です。

私たちは、村の一員から国民になりました。

が、より豊かになっていくと、より大きな経済単位が求められます。

それが、**グローバリゼーション**という動きです。

経済単位が国家から世界へと拡大しようとしているのです。

もちろん、現在でも、国家という社会単位はまだ健在です。

しかし、私たちは、世界中からやってくる物や音楽なしには生きていけないし、他国で起こっている戦争にも無関心ではいられません。

少なくとも今現在の時点ではいえることは、、、

私たちは、国民であるとともに、世界の一員であることも否定できない、ということでしょうか。